



北越奇談

四

ル 4
1231
4



北越 4231 4

早稲田大学図書館
第30.1.18
藏書

北越奇談卷之四

北越 崑崙橋 茂世迹
東都 柳亭種彦校合

怪談

浦原郡滝谷村慈光寺とつるの村落とをるの山林に
一里松枚千年の古木鬱々として誠に世外の幽境なり元弘の
楠正五郎入道しては寺に寂して今よ正成の鏡直筆の書
るどゆして付藏し又時ありて仏法僧鳥慈悲心鳥の啼けり
とやうの山傍樵夫常とるせりの山殊に天狗甚なり
他方の者寄宿とるとまゝの怪異とるて人と驚かす

北越巻之四

一年六月のうぶかりし一寺僧皆出て僕童一人留守成り
徒然るかりしも發去く生うる旅僧一人あり皆くは居て
僕に向くつくるは今日祇園乃祭ありは見んと欲や
否と僕の日願くへ見んと欲しひども不能旅僧即僕と僕
て去る忽数千の群衆陌にそら金鼓耳にありびそ錦
繡目に燦然として終日不厭暮におんんで旅僧皆ひゆえ
とと即一の菓子登に至りて菓子箱ととりとめ膝のうらに
寺にめくると見入るが旅僧忽不見く怪しき思ふ見くるこ
京二条通菓子登某のちるしあり又大工木挽かんど偶天
物のほりつくるもまゝ忽其人の衣服のんどもら去りてま

杖の枝に掛くこれとゆんともとるこま即堂頭の日び
とけ侍へまは和尚袈裟とかけ其杖の下にうら空にひら
曰又いづづとをなせしものうらおく衣服と主に返さるる
即其衣服風に随て地に落也此怪我日くはて一このび
いべりしぞ

其二

夏和三年奥州の士某越の柏崎に廿二日途中石地乃
返れるをつぎて即その士るに先立ちも丁をかりて
とてのちるくと月くが忽りまばあらとどる方そのあは
とてはて先の沢推谷にいりり同登にまると同登甚を

前まへののり家人かみん足たとのやと小女こむすめとせむはれは忽たちまち家うち動うごく諸しよ番ばんお
 けのれとおでん人ひとカかをもつつて制しぎて或ハあ食くせんとらら時とき鐘かね
 釜かまさんど忽たちまちおおままぶぶ梁はり上うへののぐる小女こむすめといつつて説るときき即すなはち
 老おきなわりて幸のごといひひつつて故日ひ近ぢか村むら競まひまききつつてあれとらら
 り誤るつ怪あやをそととるときき銀ぎん鑢ぼ棒ぼうの類ひとり手におままく
 その人ひとと打甚たぐまの怪ありしが一い月げつのありりのいてつつとかく
 けり止とぬ○同どう年ねんの秋村むら松しょう山さん北きた河か谷や村むら百ひゃく姓せい某たが近ぢか村むら子こさ
 の小女こむすめとかんくらら一い日いち連れんの幸女むすめ相あ伴ばんて村をの茶ちや屋やに至り
 各おの柿かきを求め食ふかの小女こむすめ洗せんつして買かひらふとのあらどひひり
 足あしとあはじ忽たちまち面おもて赤あかく老おきな穉ちやくのときき借かの白衣びやくをかきありて以もつ

とわとくく人ひとと同くく小女こむすめとららら即すなはち店みせの柿四よ五ごワわ柿かきのれとおままく
 小女こむすめが袂に入他たの幸女むすめとらららのありりといふといふといふと家うちにありり
 足あしにいらりといふといふといふと皆みなおままくて懐に入主しゆ人ひとといふといふ
 のやと親の家に返さんといふといふといふといふと忽たちまち家うち財ざい道だう具ぐのれといふと
 めぐりて家うちの内に居り不鞋くつ小女こむすめといふといふといふと上かみ坐ざに坐りして
 へ即すなはち村むら長ちやうといふといふといふと其その家うちにありり小女こむすめが上坐ざにありりて
 且かつ怪あやと角會かく乎やに忽其その庭にわにありりといふといふといふと一い丁てい花はなをて面おもてを
 へいんとといふと村むら長ちやうかどうも進しん出しゆれば又また盥う二にの香来きて頭に覆ふといふ
 へいつつて村中むらな以よりり騷さう動どうしといふといふといふといふと即すなはち日ひ其その怪あやを
 と願主ねんしゆに告入こ即すなはち足あし怪あや二に人ひとといふといふといふと其その実まことをいふといふといふと

怪物小女に
怪異と
ひそ



于時足怪その家へつり上坐れつゝ小女とせも同へん
てはより斧一丁巻来て足怪の鼻がらけとて落せけり
て衆人つんともどもとふ一敷日へつゝつとなく止む
つゝもの怪異ともあつて是も皆天狗のわざとけり

其四

安永の頃坂本村貧民某の女月御酒造の家へも公せ
二月乃お傍茶に談ていふ今曉夢に大松帆とてりて我軍の
窓の下にぞき其帆板の上白き巻一止つてありしがむ
懐のちり入るとつり皆く夢て其夢の吉うらんては
税とかの女とてんて笑とて火着いて炉の灰をひき

忽ち二百文あり主人怪て女のぬきとてくせり
己りて又二百文と灰の中より出も家人大まにのちと皆く
炉中のむれども一ッもあるとなりかの女火着とてん
して沙ありそれより女袂とてごれり沙あり懐を開け即錢
や至る所皆自然に沙ありて不絶と主人その怪とふく
つゝいかに女家に至ると己に錢十五文と文とぬき
のちとてかくも依て新渡他門舟問屋某の家へも公せ
蒸と川崎の捨の忽紙につとつるものあり取あげてあれと
足れば遺金三十五両なり後捨とて主より是を以て他家
に嫁して今も富是あはれに奇怪とありて

其五

地藏堂の西糸淨湖の邊七ヶ村と云ふ所あり農夫某者
 者秋の暮過る頃うらんの夜家人皆寤とひとて地獄の下
 に繩とわづらえ居けるが夜ついでて窓をくぐると繩の一
 ちまうりかゝるまはやく其のいと寂と物とぐくわたり終に繩
 ととてまゝに圍に入て臥しけるが翌日早く起出で居るは其の
 のうらに足もなれざる本の葉青黄打まてアとて「其むらり
 有りやうりけごとくも居ると云ふ一時に其婦飯をかりきおひて
 家内打考食んとするに釜中飯已よむらゝ家人をどらけま
 其食いするもの代ちとどそれうらて飯とてまてつらぬも

くかろく度ふとくとも忽食ひつてとてつらぬものみま
 けごとく同に居るとまければ力不及おひつらと数日家にあり
 て食もろと不能依る家内皆外に寝り空屋にしてゆらざる
 と一月のまう後まゆりて飯をかりて其怪已よ去りて元乃
 といつらなるもの本葉にならまてく人の食を食ひけん
 不忌美といふもみ成のまうりあり

其六

夜、筆焚とつらると小児の世伽むらゝとつらとてむらゝに近來後
 以怪あり頸城郡高津村塩坪某の家来夏の夜遠くあそびて
 子の時とぐるひひとりゆりまらるに村のむら四つ辻のむらにまら

火忽しくて又きゆるぬむらと故度彼男抄りひらく朋友いふぞ
 涼も居るうらんと却て是を我れ敬さんうらぬねき返して
 密に寤るひんれバ隣家某の二男なり雨の脚をうらぬ以儘
 とかくてうつふま地上に坐しその両足のるよりさうくとまき
 火燃ゆると一スむかり面色をうらぬ皮肉やせおとらへり
 かの男あやうりにかおらまきアツト声を出せば化持顔とあげ彼
 男をうらぬ莞尔笑ひ忽きえうせうく入るむかぬの男あはく
 走りゆりて卧しぬ板壁をうらぬぬらぬあうらぬ垣主人は
 いふに馬の草と荷しむかの男起出さう強かしく推入山岨
 草壁に至り見れば細川と隔く早く来ア草と荷するのあ

男細川と一巻いし誰ぞと声とかく其人のと人ふうひきて
 顔と見れば此夜のけの火を焚く男なりわきうりに打撃さ
 くものさうらむまじれば其者のうらぬ必此夜のと人にけり
 てしるるとは一言に再びむ撃さうくうらぬげゆりけるがそれ
 より病に卧し不起と十日のうらぬつねに其村に居ると不
 主人いひとぬをよておのれが里にわたりぬ月大光寺村鍛冶
 某の母匠来は怪あうらぬうらぬ人妻うらぬ此怪の
 人の三年うらぬむして必神気衰て死を徳てけ南ふまき
 畑の土に交り石澁雷斧石鏡ホを出すと去り去去去乃
 妻は地にうらぬるにむら兵火のうらぬ焼れる戦場と

かむく焼石瓦土器おるどかへし然れば予是を按ずる
に此怪も傳尸骨の類に似て苦愁の冥鬼塚に乘り人け付て
此怪崇と名する不名美らう一奇なり

其七

海上の奇なり難しその中幽冥舟といふ常の人乃
おぼゆる所なれども去密曆の秋五ヶ濱船頭孫助といふ者
水をたれ七人乗順風の帆をとりて松前と出三日といふに
佐州の沖越後新浮と巽の方へ見えし頃俄に逆風落
きてしる裏帆引えりて船已いらがらんとも舟子あはて
まらざるおと打帆杓まらむをやなんど狼狽するにわど

かく怒浪山のどく打かさなりて頂の上に出れば

さけ袖くぐけて去人の者其海底の魚腹にわらむ

とらまりぬまらるに船頭孫助一人波上の浮出するあり

舟の破れさけし板一枚長二尺をかりわらむがふにさうり

孫助うれしく浮本の亀とあはれ取つて一息つきたる

あやめると目回とも目己の暮をてしり風雨日は

がく鯨浪千尋の底よりけさのうと咫尺もわらぬ暗夜

はゆれと佐州づれと越後の方ともあらうづれへ志し

あらうべまらりもまら然れどもりや命の

心中の金毘羅宮と念に伊夜日子にまねて只一片の唐板を



船頭 孫助
洋中 小舟
幽霊 船

かいらぐくとまなすく 隈居一が丈波ちまういのうらまゝとく 水底に
ちつむと押入が又ほまもさるのまゝをてぬべくかえり井り
も忽沖のかさうり大勢の立強ぐ押こりもい抱切れ
荷はうて楫並せなんどひうく 其舟己は程あつくまゝなり
とれば孫助うましく何率一くはぬいさそけのせはうらむを
と波間より顔ういつててこれとらんれば其舟をせにばこけ
くぞけうとどく十人むありの舟子左右の立まらぐあり
さうよさうい生る人も押入を面まざるも瘦れうらまゝ
姿のやちもあつぬ圍られども氣のどくちの足んく右の方
と漕とり瞬の目にむ十丁のまきとけり忽一日のむははれふ

声く其舟がうくと打うぞけぬはづらううせてあつ波
とろくとぶらう声のなるうぬへ幽冥のりのなる人一と一か
仏神を念じと久居るうらに又た下めのとく立強ぐおと
く声くいぬうく 其舟のくぞけうの呼に至る忽は叫
ひてはうせぬあひなること幾度とつと試あつて見るに魂をひ
かきゆるがとく己れうと夜もほりうればる風をこりやうれ
ともうまてかへべき舟もあつてもゆれと回當の山本とも又に
うへくうとちみれば次舟に波よりまはれ潮に引くれく森湧
くも蒼海のくう久居ると二日二夜なり漸くに波風あつま
空しく晴れども力かつれ目もうらうらくゆく其浦山を

けきまゝ人がぐく又まきうに餓からきうれどもにの味入るる
 ののもう己に命も絶入ぬまき呼ばるゝともちぬ葉葉二ツ
 波にゆれてまき赤れり孫助海に是をさう用きて見らるに
 赤き蕃椒二つあり即是を食するよさうに辛きもかかると
 腹の空するまに十たかりを食しければ忽餓とあのがか
 さらちなるも試みかくて其餘と首のかけうする所一ツ二ツ
 と食しつわに三日に及びける船佐州の方より船一艘航せり
 て来れるありありいれいれ舟の向ふかば公かけて才かと
 おきて遊ども馬しる海上只一口野に居るかと一樹く船ちうく
 なるわどにちまうに声をまれども音うれて不出いせん

りえくろしとんじが忽一計をすひ出しかの昔赤苞やよのす
 あげく舟の方をまきまきけしばかりあつ親父是を見付ぬる
 人のけさうんし帆と下げ櫓をゆくと漕来り竟に孫助を
 引あげまきぐに少抱し才と煙糲るどまきめいさうければ
 言行り始り始りの艱難をおかすに島の者ども大に驚き
 まるとに命つうまき人うらとて終に是を送りて新浮いさうぬ
 予寛政丑の妻かの地はるる教日匠番せしはあの日七十
 ちのりの老人まきお見や宿のあまは老人と指さしうけ
 翁らそかの命つうまき人うらとてけりひぬ予其実成回りの老
 人の曰出いへいと安くぬれども其艱難とてるるとい才のけ

よららゆまの才の毒とぞんぞ其後の不潔とぞり今に七十
三歳とぞ誠の命へ天にありぬるもの

其八

世に幽冥の怪談甚とわわいとくとも諸國古今皆お類ともの
話のくくしてつよまの真とぞんまの説とぞり予は年乃とら
池端に居ありし時田間十余丁を隔て圓福寺とぞり禪院
あり五月廿の夜うん終日爰にありてひたりとぞりけり來る
に連日の梅雨小川の氷とぞり梅己に落くとぞんともとまきやう
まに依て寺の後にりり梅とまきとけりまきりのやありとぞり
秋の森深く古墳累累とぞり只數十の卒都婆ありぬるも其中大なり

卒都婆に對して独言して曰亡者我今此卒都婆とぞり梅とまき
けりんとぞり明日かきとぞり洗ひ清くくひまきとぞり終
つねに其卒都婆とぞりまきりて先の小川にありては梅はして
家よりゆりぬぬわくる日乙地松系とぞり卒都婆よりかき寺あり
終日又のそびりしてつねに卒都婆と返るとぞり居り
こそ水もひきとれバ其疾人まきり獨りの裏にあり梅り小川
のりくはありとぞり忽其卒都婆とぞり亡者の物せりとぞり
出づ終に卒都婆と水に洗ひ清くをのさげて寺の後松林乃
中墓所にありとぞり挑灯己にまきとぞり咫尺もあやむ暗夜に
かきくんとぞり墓所ともりまきとぞりまきとぞり石礎

地蔵のわらふよさんと権圓しくかの卒於婆のぬけし跡を
おれども数百をかりしびらも墳墓をれば又に其時いし
あつとど己に時うつら公僕く忙然と立居しひより言に我れ
て曰亡者卒於婆を返もと受取り人其言兼しゆとあつと
に其間六尺のやうも先うん墓のうらより陰火忽然と
燃上りて卒於婆とゆきしとあつとゆきに又入りしぬ予
かの卒於婆と元のどく立合掌一拜をれば陰火消せて又
玉の暗くふりけり誠に無鬼論の説はあれも遊魂の怪は
其九

関谷大島とつ了野の百姓某娘一人あり養子聲と定ひ五年

いして娘懐妊を老親夫婦甚と喜びしつりけるに其児生てのら
三月より死せり老母は嘆きその死より児をいさめあげ汝果
報少く祖父祖母の顔も又知るで又黄泉にゆきて汝必再び生れ
りつて来るべし其下付くやうんとく候とたにかの娘三
指に茶釜の下を付死し其児の腹をみて終に鬼を葬ぬ
一とせめりつと歴て娘又難く生るに及で其児即胎乃人れ
三指のあく黒くありし不徳十歳をわりの娘まきくありしは
消うせぬ不徳夫といふものあり然りとて人世上中智の者
必は説を夢て万物の生死皆汝のものとも世へうと人知各
差別ありて百人にひとりたりも門とて汝不徳儒仙神の

よう士農工商を日世間の交にいつてもまじくゆれを異なりとせん
 といは仏を以てこれと論ぜん煩悩即菩提生死即涅槃と見破し
 四大本に飯一性空に去る苦樂より小まらうる是を以て悟と
 才一智とを其下数十段にして不可成仏名を稱し別世界
 と願ふ下愚の人の示すの方便ふくく勸善懲惡の教實に治
 國平天下の奇法とをまじく智にして愚とそくく明智の
 只此道上に以て聖智なりとく下以下愚あり下下とて必智なり
 一むべうも上智なりとく下下とて得難く中智の疑因あり
 下愚はうくく下下とて信とゆへに是を予密に辨るる死後の
 性ハ今の性と申す所はありて仏とやうん鳥獸とやうん再

此生と死(者)死して又其性の託る所をゆくと生とて仏を愈
 別世界と死(者)死後の性の西方十億土外に於てつかる
 仏とやうん予は是を知らざれば十一億土外に於てつかる
 うんバ又其先十億土外に行行バ其性つるに真空に帰
 まるやうん今今の俗世の中智の業より空とて他の空
 かりとて知て其己を空とては知れども神の道を行ひ
 とも六根清浄なりとてしるくと不狂聖教と字んて行へ
 不能仏と信じて其性を信する不能煩悩止時より死に
 者其性凝塊して不散碎なくして苦愁際つるまかり是は
 地獄とて生死の間に託とて是を迷とて喜怒愛樂に公

と不序生死二のうらゝ念と断りの死して其性真空に皈を是と大
 悟の人といふ凡後の生を我と者らのの洞をその説とよろらふべけれど
 生ハ皆迷にして今の生後の生と不知後の生も又今の生をたつと
 是と以て之が予今貧賤下愚即死後たると富貴上智の人に
 生るとも今の我のうらゝ何ぞ何ぞととらに思ふん
 只今の生人の富貴上智とてアむがどくやと然バ大悟乃人
 生死とてそれ真空に皈をたてば何んゆゆける聖人のるも
 仁義の性正しく孝貞忠臣の行ひ不違今の生と守り得るを
 死も又安然とて迷ふ所なく豈大悟の人に異うらんや

其十

妙高山黒姫山焼山皆さる山なりそれより万山お堂より信州戸
 隠越中文山にのりて数十里に連りてアそその深遠つ
 へうと高田藩中数千家の新皆山山中より伐出とてその
 凡をのり木挽山の業にたつまで各誓て曰山小屋の在中
 つなぐる怪ありとも人よかきうらゝとてあり一年并山某
 火彼にわくると数日山小屋にありて夜々人ぐ打寄火を
 焚くと不絶これをかきとてく炉にわくると山男といふ
 のやうな事とて焚火のわくると一時むかりのて去其形
 人倫の異なるも赤髪裸方尻黒色長六尺あまり腰
 脚木の毛を足る文の物つとてあけまども声を出とて牛



山男衆人の
交てよく
人語を解と



のじ又く人の言をぞよめる相訓く知る人のじ一々升山女
 のじ謂く曰汝木業とまるとい其恥ふ所を知火のあつた
 空をわたりて然る汝夏冬とわたり裸才のいづく等暑堪ふ
 とつふにもあつど何ぞ獸皮をとりて暖よ方けまらざらん
 山男つゞく是をやん去扱ね夜夜忽貽羊二足を西のよきつげ
 て奪り升山がまへのいぢく升山其意をこそと短刀をぬきその
 皮をとりて山男にまて山男まきりには休用き打笑ひまぢか
 去それより二夜も又小熊一匹を扱ひて是を小屋の中
 へいへて去が已れり又ある人ぐ是を刀割れば先の皮一枚
 背を傷みぬとてりてつらき合せ一枚の腰を纏ふれば生皮

そのまをぞとるツノ乾くに酒くらとらとらり伎張しう皆を打ひ
 依り熊の皮とり十文字のこも竹杖のれ小窓の軒に掛けそ
 一丁杖わらでつじひ
 其の後は日不来とくく予是を夢て扱むるに凡山男山女とる
 へ鬼神の術あるがごとく言傳くされど全くたはれのうらぶら
 郎山中自然の人様けし言傳おふとつければその服巻
 とはちたれれば裸するものにて只夷地五十年前の風俗は
 く愚の甚しきものなるべりく是にち入道のてはくを教バ
 文化甲子の夏信州にありてひ中倉山と
 言ふる山にきて山女の侍する四代目する凡三河あり右所と

土通巻六

谷代隔て本林中にあり山燕の巣甚だ多し今川とよふ
其上絶壁の中腹に在り下より仰るると数十丈かの山文と見え
おれども洞の口草苔の生るうくまご奇癖なりいも信るま
わらざり雪中に山の中丈かる足跡ありと云う

其十一

高田丈又を係才某西山本に在れ故日角りけるがめた急
ける私用のりてひとり山路代わりしに洞の入り口ありて
不慮丈人の約逢う其形赤方にて長八丈をかり髪肩とれ
目の光星のいゝい鬼一と捉ちづに歩行兼丈工藝して止ま
ひかの丈人もおとすまはくま止りてつらにおもひを捨て

後きつて山に坐りきりぬと云う是ホホかの山男の云う

其十二

神田村に鬼新丸とつと云うものあり其性暴悪にして物の
命を奪ふと草と荊をがじ里人親族と云ふもそつとて成勝
んでおひくふ愛に村をとるものと十餘丁山神の神社あり其下
流流湛へく水色甚かむいと云ふ里人殺生を禁じて是を
そつとてつとてたうお中ひひとり其所はより鶴縄を
引きしてちるきつるに夜どく甚かなくある夜又いづるに
澤を引くに青より赤一つも不素夜おにも又まてしるに巳に
曉方及んで山の上よりゆとゆと氷ふる音のう人をり

歩行する音も我ながら小庭の中より窺はれと配ひしを
 其ま一又あまうりある男後目の上に覆ふよき出まきり彩
 方ら恐れて声も出さず小庭の中よき居りし女の文男
 近くあゆみ来り小庭の中へ其のどくかすもみ紙さへ入我れんと
 つし出しくらうにわげ花とちりて執りて気絶しぬささ夜
 家の女房我ながらがゆりの常より遅まき紙以てさくくかの小庭に
 つり足れば居りし又足跡もさし男驚き立ちかたり是と村長
 びんと出く山々谷々へ入るるに北谷二口とさくく彩
 ちの雪伸れたをれ死も人々驚きたまけ来りて家に入共
 とそさ煙ろんどけけるに一時あまうりさささて人々地打れを

教生ハ止しれども三年と不待してなぬ涼山の奇なり難し

其十三

新厚真浄寺ハ大精舎なり寺中の傍某秋の夜しとまゆ
 寺にわづらそく独塚際小家のお紙通りしそが忽公淋しく
 するて才の毛もさるあふりは顔もさ葉草耳の廁の松根南風
 ちのまきよるる葉の影にまきよる人の歌一ツありてあはれ
 其莞尔とけし傍響きまみ声を出しりらるる杖はてかろ
 とらるる打その声に近所の人々目録号し後そと同
 方の日化あめり記まきよるとさよふとどに近隣皆て出でて火
 とそり一是を刃をさす南風杖の打とるあはれ人々くられへ

人の頸にのめりて南氏あつたなりけりといひけるに傍に己が
 臆病と恥づるは其南氏と打とくはぐれくと声のりて怪と
 其のかけをよぶしむるに忽ち物子のどくろる蕃一ツ葉のかけに
 ちくち居しうあはけくせめあつて一方に打殺しぬ博物志
 に蝦蟇の三奇状出と釈文に蝦蟇おと呑んとては成用け
 ば其をおと引奉りておのれとはに入ゆなひきと言又千里の
 外に捨れども一夜の中にけりあつたといふと和判とてのり
 予文化元甲子の夏六月信州尾金里山中松巖禪寺に停
 留し障壁に画と教日其寺の後園に文蝦蟇教十のりて美
 奇より旧口と出四方に乱巻して食とむむそのことからくと

の象か
 置一とままでふ短夜の眠とさすまぐさるゝと連夜うり是の依て
 予堂頭和尚に謁しははは以かの蟄と他牙に移さんては待て
 和尚の曰されば二年は湖の傍にも打奉りては蝦蟇様字
 とこぬたぐとく一夕洞はより跋出りてうらおひ候一ツに入
 門前の急流いそそりしがおまお皆るりあつてはのこりか
 と旁して功なりと予是を夢てとては蝦蟇の二奇と知る今
 一奇なり密室の封むとつと一夜ふりて出るところを未
 是を試むとと語りけるに君ま傍をその夕寤に大蟄一ツ
 とくく人を見を釣盤に入板石は以蓋と其上のうは文石は
 のがせ我枕のらうき障子の外にたきて以その奇を試んとと

叔母夜他の蝦蟇ガウキと鳴りてゐるのかの湖盟中只時々少く
 と微声のうて予も又眠るゝとわへんども丑の時以より寺僧紀出
 て堂上の焼徑の声喧し漸々明七のにもなりんとすし入内分
 四方の散乱せる蝦蟇忽度の響あり其鳴声数百群あり
 一が忽其声止るゝと蕭然とわもて又湖盟中の声も不歩
 うらぬ予怪しくわたりて臥居するにや若き僧徒二三人走
 るりつゝのと同へ依て予も起上りかの太鼓のけ板を成たり
 て湖盟中を乃るの文の一括なり不思夫とつゝもさ成の事を
 めり凡蝦蟇鳥と畏るゝの太猫とソくどもさし省ざる成
 かけてゆく突に蝦蟇ハ虫類乃怪おなりけ一乃代邦

ありとも因よめぐ

其十四

村松の諸士河内谷の清流に釣をまゝと其常なりゆ人に
 その坐と人ま岩憩へて木蔭流のよもてなんどのれん
 ともゆるる術とより居たり一日菟田某も岩頭北へ
 せれども益るる以まゝ魚一ツも不ゆゆに方位と相川の
 流をりて遠なる水上にのびりて其よらしき野火とらぬに
 山陰池く淵に臨でなりありて疾まゝる岩つあり凡盟三
 ぶかりも妻へ即其上に坐し釣をまゝに又一人の士川向
 ひの岸にまゝて釣とすや久く川向ひの士急釣等代



ふさあつたものの方に向ひ密にましまつたさうしてあつたふんはつた
さう教でめいのも言をわらうさうさめま川下へ逃去るぬ岩田氏
も何れ公淋しくさうて岸にめぐりえの及成ゆり浅流をさう
其人に走り付く何れのゆゑと問彼士大息つきさう扱さるる
不知即公の坐する岩忽両眼を閉大うるに少くあけく
わくびさうさうぬびく又眼を開く其眼中赤き火乃さう
先て恐るる言さうは是必蠖蛇さうんとさう逃ゆりぬさう
朋友お伴て其所にひてさうさうどもかろ岩とわらさう
さうさう是も山中大蝦蟇なりさう

北哉奇傳卷之四終

